

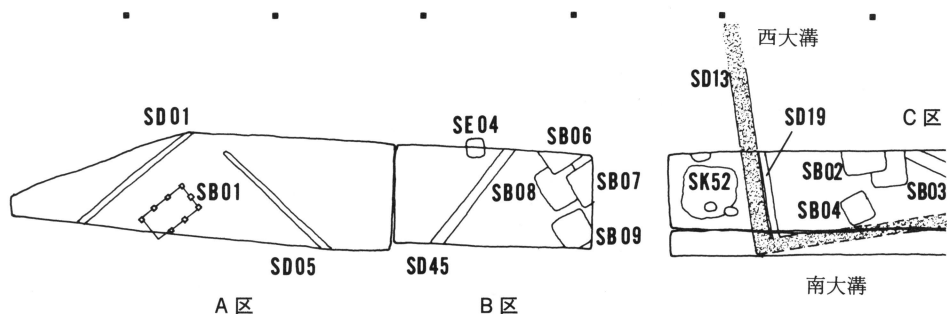
ほりのうちはなのき 堀之内花ノ木遺跡

調査の経過

堀之内花ノ木遺跡（稲沢市遺跡番号 5 - 4）は木曾川の分流、三宅川が形成した自然堤防の左岸に位置する。行政的には稲沢市堀之内町に在り、「尾張国分寺」の石碑が存在する矢合町の南に隣接する。

遺跡周辺では、昭和36年、中日新聞社が中心となり、愛知県、稲沢市などの協力事業として発掘調査が行われ、尾張国分寺の塔の心礎および金堂とみられる基壇の一部が確認されている¹⁾。その後、昭和59年に南門推定地を流れる用水路の護岸改修工事にともなって稲沢市教育委員会が発掘調査を行った²⁾。

今回、県道名古屋祖父江線の建設にともなう事前調査を、愛知県教育委員会から委託を受け4月より行ってきた。調査面積は7100㎡におよび、東西約450mの細長い調査区を西より8つの調査区に分割し、調査を行った。A～C区を4月から、D～F区を8月から、H区を11月から調査を開始し、1月にすべての調査を終了した。調査の結果、本遺跡は、尾張国分寺関連遺構を中心とし、弥生時代後期から中近世にいたる幅広い時期の複合遺跡であることが確認された。



Y-35700

第Ⅰ図 主要遺構配置図 1:1000

調査の概要

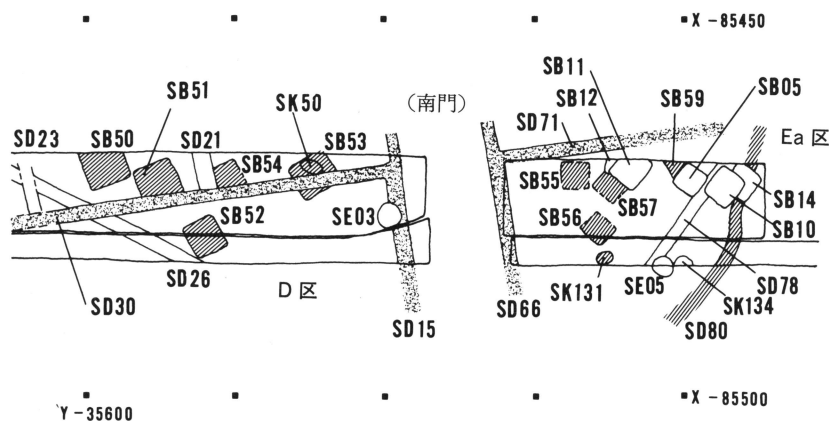
調査区は三宅川左岸の微高地に立地し、標高は約2.5mである。基本層序は、第Ⅰ層：耕作土、第Ⅱ層：褐～暗褐色シルト層、第Ⅲ層：黄褐色砂およびシルト層である。

遺跡は、出土遺物により、A期：弥生時代後期から古墳時代前期、B期：奈良から平安時代、C期：中世、D期：江戸時代と4期に分けて考えることができる。ここでは、紙面の都合上、A期およびB期を述べるのみとする。

A期 この時期の遺構はC・D区の東半部からE・F区の西半部にかけてと、H区の中央部に見られる。C・D区からは弥生時代後期の竪穴住居5棟が検出できた。ことにSB53内の土坑SK50からは多くの遺物が出土した。E・F区からは弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居4棟、溝1条を検出した。H区からは古墳時代前期の2基の土坑よりパレス壺、S字甕などの多くの遺物を出土した。

B期 遺構は調査区全域に散在するが、B区からE・F区の西部に集中して見られる。A区からは、奈良時代の建物跡と屋敷地を画する溝を検出した。C・D区からは幅2.2m長さ約12mの南北方向の溝、幅2.0m長さ約72mの東西方向の溝を検出した、出土遺物、規模からして、尾張国分寺の寺域を画する溝の可能性が高い。その他、土坑、井戸、住居跡等多数の遺構を検出した。E・F区からは、竪穴住居4棟の他、溝、土坑、井戸を検出した。

(太田芳巳)



斜トーンはB期、その他はA期に所属

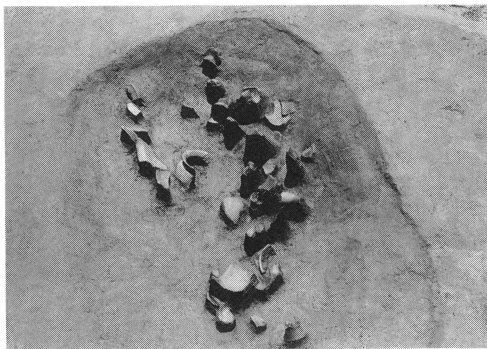
A期（弥生時代後期・古墳時代初頭）

遺構 C・D区東半部からE a・F a区にかけて、弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構を集中して検出することができた。これらの遺構が広がる地点は、堀之内花ノ木遺跡が所在する微高地西端に位置することから、さらに西低地部を耕地として取り込んだ、一つの単発的な小集落を想定できよう。またその関連では南側に所在する琵琶戸遺跡も考慮に入れる必要がある。さて今回検出できた主要遺構は、竪穴住居9棟。土坑及び土器集積が3ヶ所であった。出土土器から山中式後期³⁾をもって集落が開始され、廻間I式前半期をもって集落は消失したと推測でき、その中心はおおよそ山中式後期にあり、その段階でほとんどの住居が築かれているようである。ところで竪穴住居は全て方形プランをもち、S B50・51は検出面で約方5mを測る。S B52（廻間I式1段階）は4.5×4mで、四隅に主柱穴（西南は攪乱）を確認し、中央やや南よりに土坑が存在する。また全体に炭化物の堆積が認められ、土器の集積が伴っていた。E a区の展開する住居は古代・中世の遺構との重複が著しく、形態の把握ができない。S K131は皿状の土坑で、S D80は幅1m深さ約0.4mの溝である。なおこの溝を境に、その東には住居は存在しない。S X03はS D80よりさらに45mほど東に位置する土器集積で、周囲には数基の土坑が営まれていた。S K50はS B53内に掘削された楕円形状の土坑で、2.2m×1.3m、深さ0.35mを測る。土坑内より一括して土器が出土している。

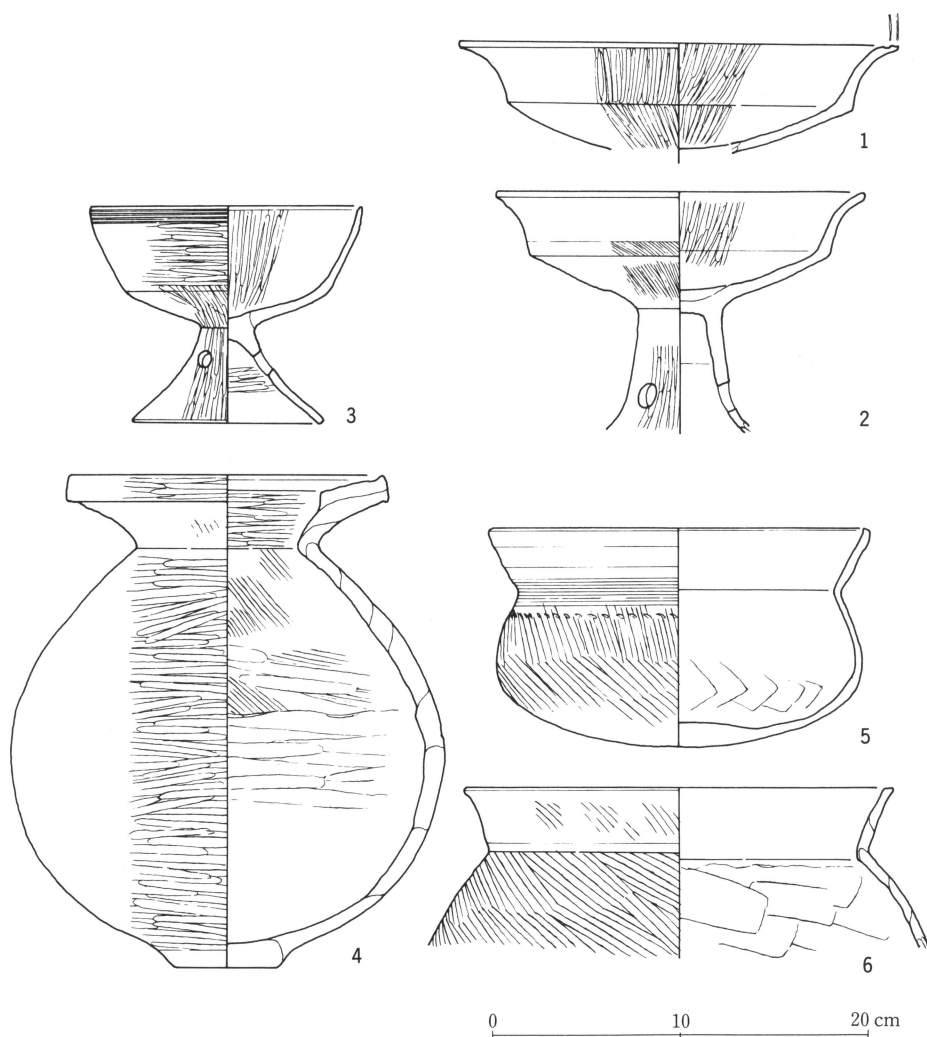
遺物 第3図はS K50出土土器。7は受口系甕で、口縁外面に刺突文、体部上位に横線文とやや不揃いながら刺突文を施す。8・9は口縁端部に刺突文を施す台付甕。12・13・14は有段高杯で、12・13は杯部外面上位に波状文が見られ、口縁端部には2条の擬凹線が巡る。14はミガキ調整による高杯。15は鉢で、口縁部には有段の痕跡を残す。16はパレス壺の口頸部で、内面文様帯以外は全面ベンガラ塗布。17～20は中・小型壺。その内19・20は、土坑最下部より出土した。これらの資料は一宮市苗代第II地点出土土器のものと類似するも、やや新しい様相を留めるものといえよう。山中式4段階の良好な一括資料である。第4図はS B52出土土器で、その内注目される資料としては、25のS字甕であろう。その形状と調整技法からS字甕0類と考えてよく、21・22の受口系甕や26・27の台付甕との共伴が興味深い。23は鉢の口頸部。34・35は器台の大・小で、35は中空形態を留める。これらの資料は廻間遺跡S B75と類似するも、さらにやや古い様相を留め、廻間I式1段階古相の良好な資料と考えられる。第2図3～6はS X03出土土器であり、3の資料は有稜高杯、5は有段が省略され長頸化した鉢。4は口縁内面に平坦面をもつが文様は施されていない。こうした資料は廻間I式1段階に所属する資料である。 (赤塚次郎)



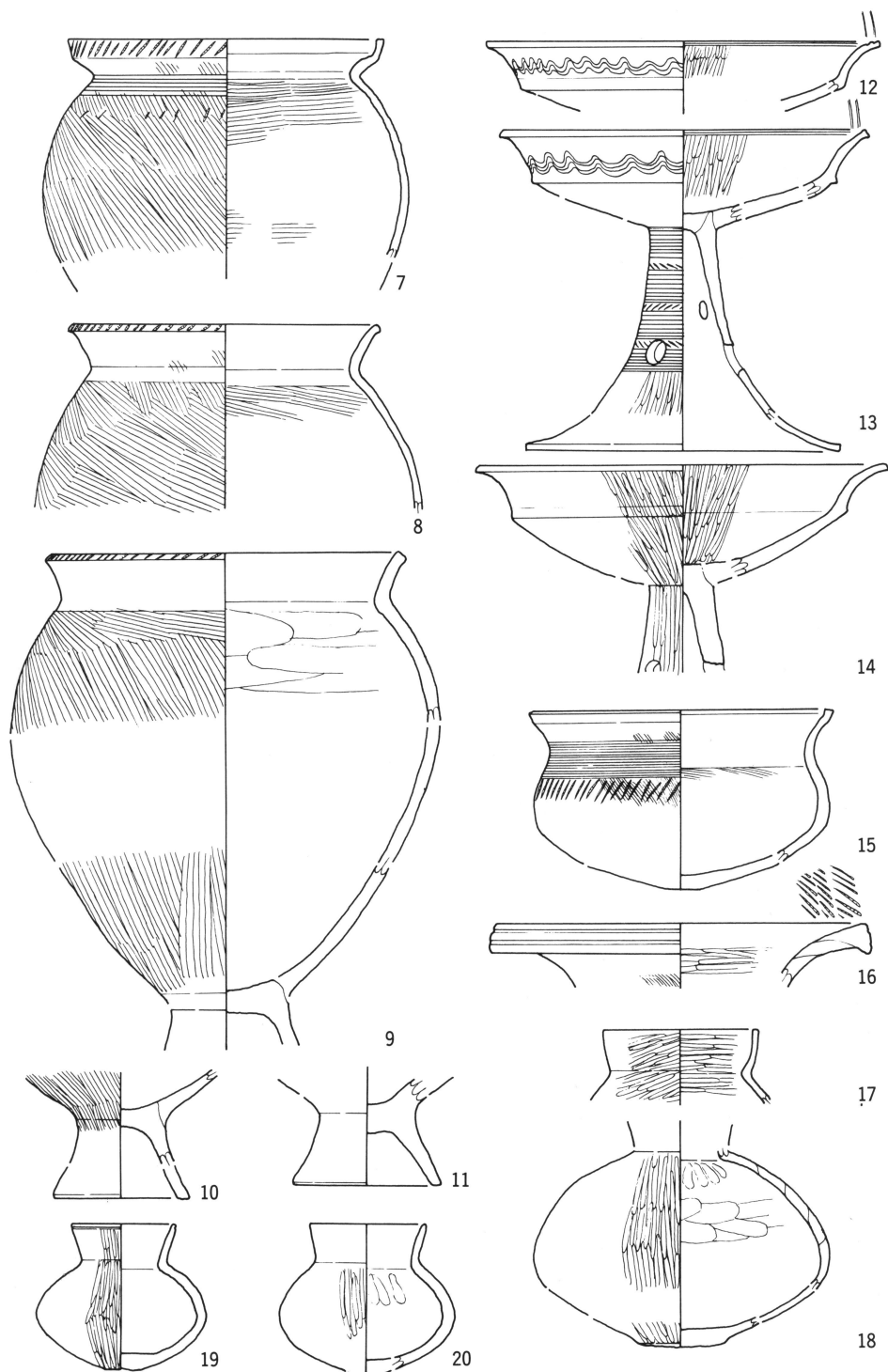
S B50・51



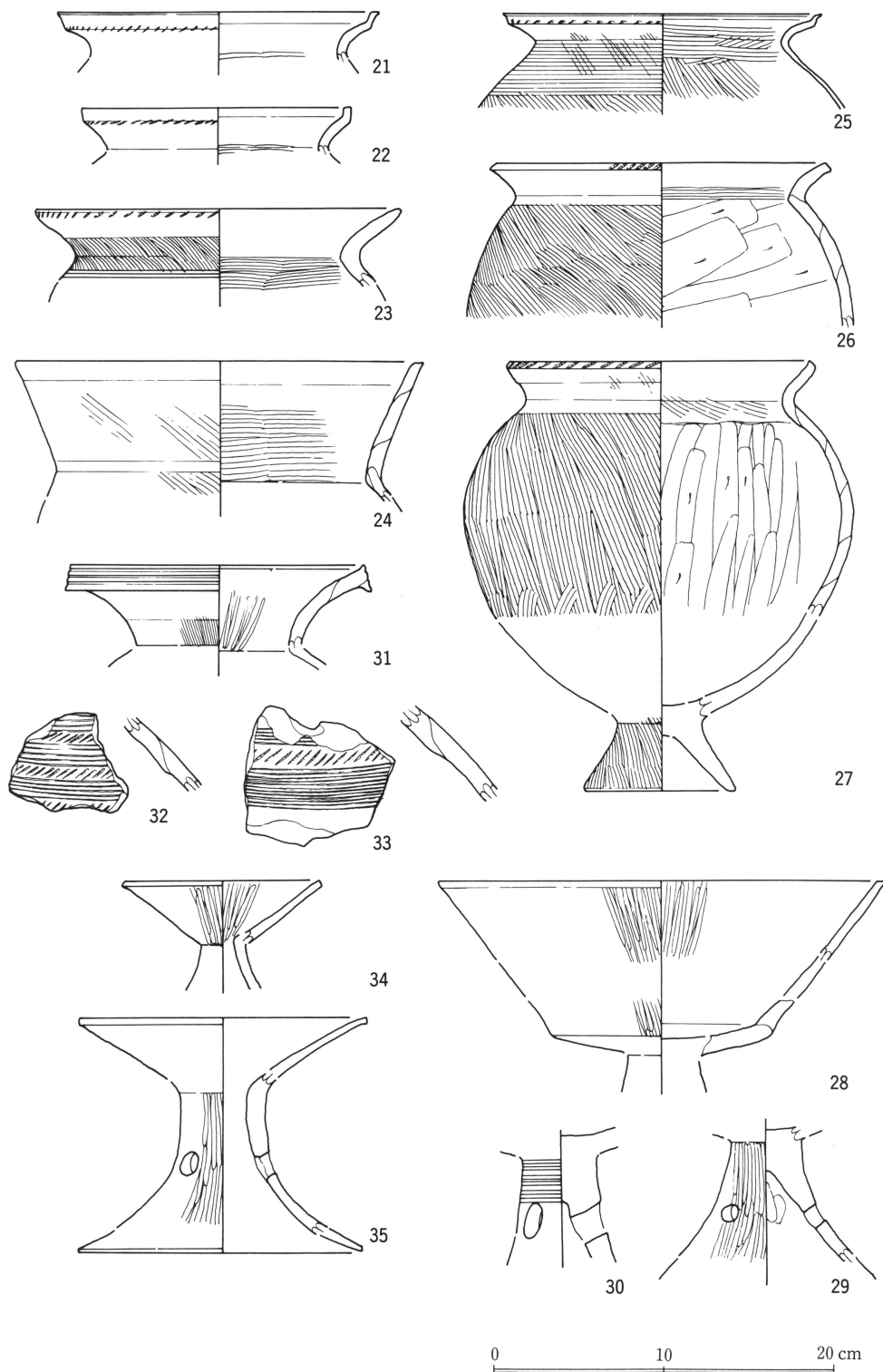
S K50



第2図 S B54 (1・2) S X03 (3～6) 出土土器 1 : 4



第3図 S K 50出土土器 1 : 4



第4図 S B52出土土器 1:4

B 期（奈良・平安時代）

遺構 今回検出し得た主要遺構は、掘立柱建物1棟、竪穴住居11棟、溝13条、井戸3基、土坑2基などである。C・D区西端で検出されたS D13は須恵器を中心とした遺物を出土し、幅2.2～2.3m、深さ0.7～0.8mを測る。C区で検出されたS D30は須恵器に加え多くの灰釉陶器を出土し、幅1.5～2.0m、深さ0.4～0.47mを測る。この2条の溝はその交わる部分に中世の溝が重複していたが、ほぼ直交するものと思われる。S D30はC区東端でS D15と直交する。S D15は須恵器、灰釉陶器を出土し、幅2.1m、深さ0.36mを測る。またS E03はS D15が廃絶した後に掘削された井戸である。径2.99mの掘形、深さ1.04mを測り内部にほぼ正方形（0.81m×0.82m）の横板組木枠と径0.5mの曲物1段が確認され、木枠の裏込めとして尾張国分寺使用瓦が集積されていた。なおA・B区、C区西端で検出された住居群（S B01～04・06～09）、井戸（S E04）、溝（S D01・05・45・26）は8世紀前半に所属し、E a区東端の住居群（S B05・10～12・14）は9世紀後半に所属する。

遺物 S D13中層より良好な須恵器の一括遺物が得られた（第6図1～13）。1は風字硯で上部が欠損している。2は盤の脚部で透孔を有する。3・4は高台を有する杯。5は高台を有する椀。6・7は高台を有する盤。8は杯蓋。9・10・11は高台を有しない杯で、底部から腰にかけて回転ヘラ削りが施される。12・13は無高台の椀で、底部は糸切り痕がそのまま残されている。以上のような様相からこれらの遺物は猿投窯編年における折戸10号窯式を中心とする時期に所属するものと思われる。またS E03出土の遺物（第6図15～27）は15の土師器甕、24の須恵器杯を除いて全て灰釉陶器である。16は耳皿で底部に糸切り痕を残す。17・18は長頸壺。19は段皿。23は杯蓋。20・21・22・25・26・27はいわゆる三日月高台を有する椀で、20～22は内面体部に灰釉が刷毛塗りされている。以上のような様相からこれらの遺物は、猿投窯編年における黒笹90号窯式に属すると思われる。なお14は猿形陶製品で、底部は本体から離脱した痕跡を残しているが全体の形状や用途については不明である。軒瓦（第7図1～13）については、1～5がS D13出土、6・7がS D30出土、8～11がS E03出土、12・13がS D45出土である。尾張国分寺出土瓦の型式に当てはめれば⁴⁾ 1がMⅢ、2・13がMV、3・4・5がHⅡ-B、6がHⅡ-C、7がHⅡ-A、8がHⅧ、9がHⅥ、10がHⅣ、11がHⅢ-A、12がHⅡ-Bである。なお現在のところ1と3・4・5が創建瓦と考えられており、7については平城宮6712D型式と同範である可能性が高い⁵⁾。

以上のような遺構、遺物の状況からS D13はS D30とともに尾張国分寺の寺域を区画する大溝であると考えられ、S D15の東側に「南門」の存在を想定できる。またS E03は尾張国分寺廃絶後に掘削された井戸であり、『日本紀略』に見られる884年の尾張国分寺焼失

記事と整合する可能性が高い。

まとめ

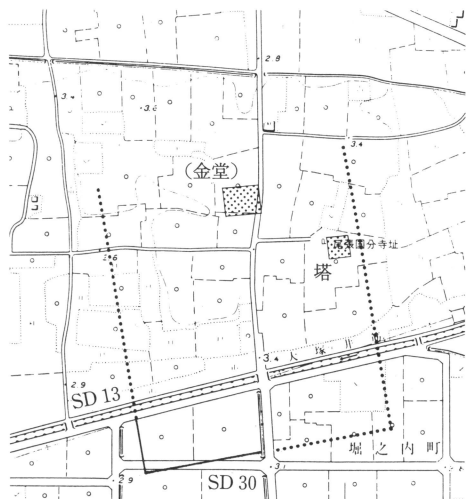
今回の調査成果をまとめておくと以下の2点になる。

1. C・D・E a・F a区から山中式後半期を中心とする竪穴住居を検出した。
2. 尾張国分寺の寺域を区画すると考えられる溝SD13・SD30は昭和36年に調査された「塔」跡や「金堂」跡の中軸線の方角と概ね一致する。また想定される寺域の東西規模は約166mとなり、従来考えられていた寺域よりも東西幅がやや短く、南北幅が大きく拡大する可能性が高くなった。(第5図参照) (蟹江吉弘)

註

- 1) 浅野 清編1968『尾張国分寺の発掘調査』稲沢市教育委員会
- 2) 日野幸治他1983『尾張国分寺跡緊急発掘調査報告書』稲沢市文化財調査報告XIX
- 3) 赤塚 次郎1992「山中式土器」『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告第40集
- 4) 註1に同じ。
- 5) 梶山 勝 1991「尾張国分寺軒瓦とその同型瓦の分布をめぐって」『名古屋博物館研究紀要』第14巻

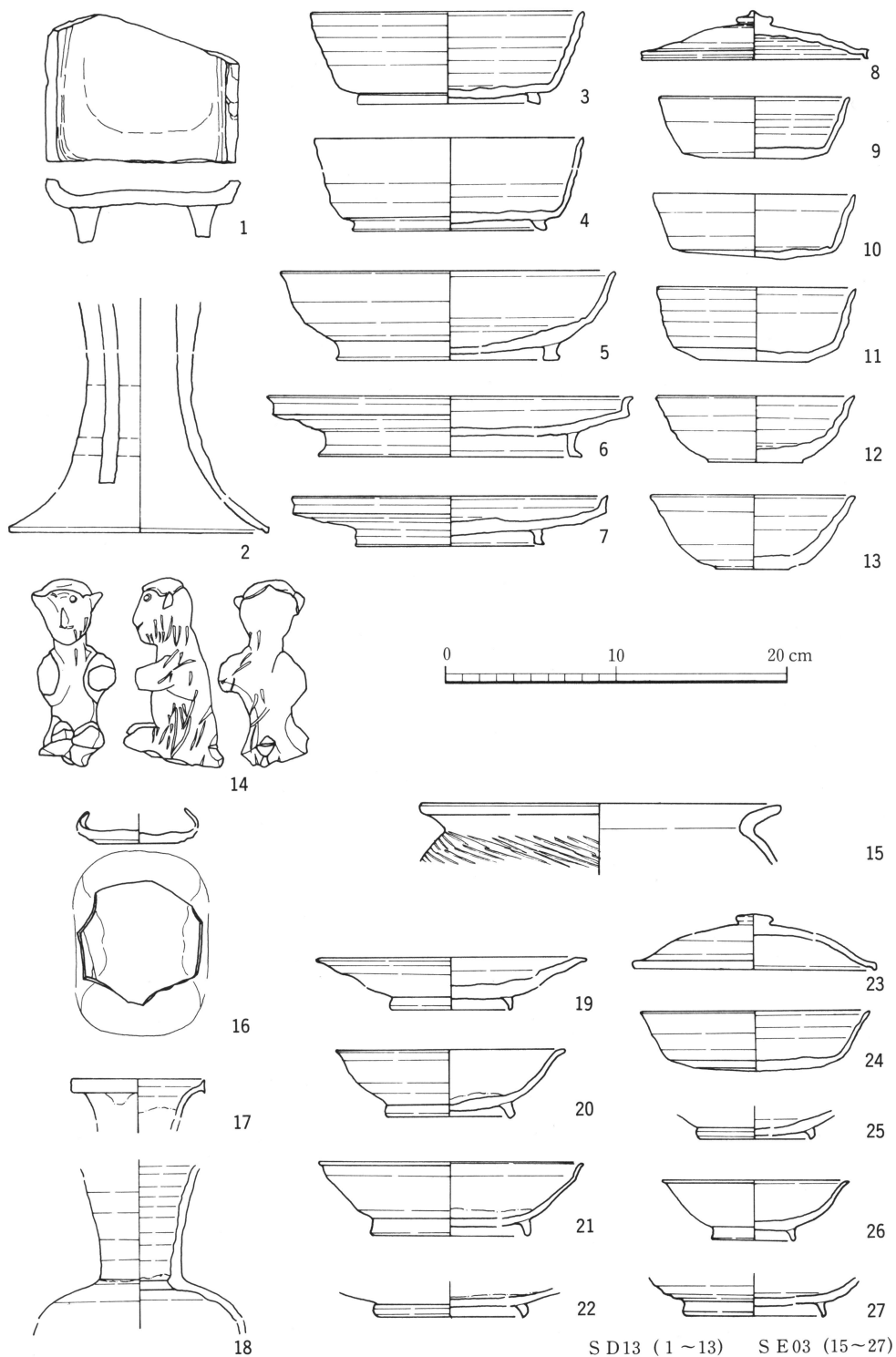
なお、調査の過程において檜崎彰一、大参義一、梶山 勝、斎藤孝正の各氏には有益な御教示を頂いた。文末ではあるが謝意を表する次第である。



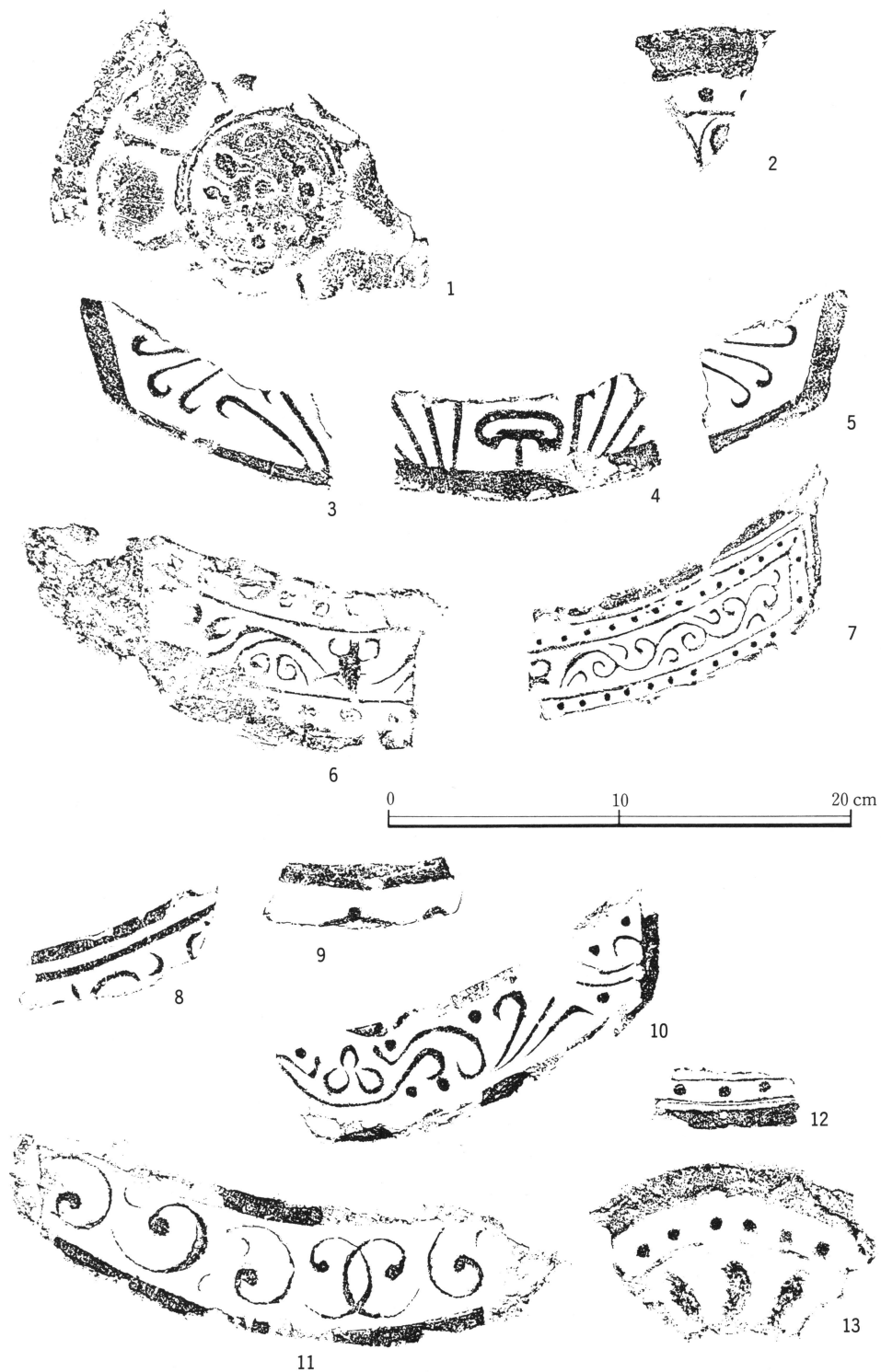
第5図 尾張国分寺 1:5000



C区全景（東から）



第6図 B期の遺物 1:4 (ただし14は1:2)



第7図 軒瓦 1 : 3 SD13 (1 ~ 5) SD30 (6・7)
SE03 (8 ~ 11) SD45 (12・13)